

---

# おてんとうさま

S e y R a i n

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おてんとうさま

### 【NZコード】

NZ417D

### 【作者名】

S e y R a i n

### 【あらすじ】

K氏は失業してしまつ。たが、以前拾つた宝くじが当選して喜んでいるところ、そこにおてんとうさまが現われて……。

K氏は、これまで特に悪くことをすることがなく眞面目に過ごしてきました。しかし、運というものにどちらかといつと縁遠い人生であった。とはいっても、小さい家族経営する会社に勤め、生活に不自由があつたわけでもなかつた。

ある日、K氏はいつものように散歩に出掛けた。毎日、雨や雪の日以外は朝に川沿いの土手を歩く。それが彼の毎日の日課になつていた。いつも通り土手を歩いていると一陣の風が吹き、その次の瞬間にかがK氏の身体に貼り付いた。

『なんだろう?』

K氏は、それを手に取つて眺めた。

「宝くじか」

そつ咳きながら、辺りを見回しても自分以外にはいない。

『何處から飛んできんだろ? どうせ外れくじだろ?。いや、待てよ! 抽選日はいつだ?』

K氏はもう一度まじまじと飛んできた宝くじを眺めてみた。どうやら発表はまだのようだ。そこで、この宝くじをどうしようかと一瞬考えた。

『警察に届けるべきだらうか? いや、どうせ外れるだらうし警察も受け取らないかもしねないな。まあ、持つていて当たつたら届けよう。そうすれば、いくらかの謝礼が貰えるかもしねないし。』

そう考へると上着のポケットに宝くじをねじ込んだ。そして、またいつものように散歩を続けた。

散歩を終えると朝食を食べて仕事に行く。そして仕事が終わると特別な用事でもない限り真っ直ぐに帰宅して夕食を食べ、テレビを見て時間がきたら床に就く。

そんな日常生活が過ぎていつたが、半年ほど経つた頃に散歩を終えて会社に行くといつも開いているはずの扉が閉まつている。扉には貼

紙がしてあつた。K氏は不審に思いその貼紙を読んでみた。

『これまで頑張つてまいりましたが、資金調達が困難となり経営を続けることが出来なくなりました。よつて、誠に勝手ながら本日を持ちまして会社を倒産させることと相成りました。関係者においては突然のことで申し訳ございません。』

『なんだって！ 昨日はそんなこと一言も言ってなかつたぞ。それより俺の給料はどうなるんだ、これからどうしろとこうんだ……』

K氏は扉を叩いて叫んだ。

「おい、中に誰かいるんだひつー 僕だくだ、せめて今までの給料だけでも払ってくれ！」

だが、会社の中はしんと静まり返つてゐる。ビーツやうり誰もいないらしい。昨日のひつに夜逃げをされていたのだ。

「ちくしょうつー！」

そう吐き捨てるどK氏は愕然として、しばらくその場に立ちつくした。彼がやつと動きだしたのはそれから3時間も経つた後だった。『これからどうすればいいんだ……今までだつてギリギリの生活だつたんだぞ。貯金なんてほとんどないのに……』

『氣づくといつも散歩する土手に来ていた。すると一陣の風が吹いた。その時、半年前の事を思い出した。

『そうだ！ 宝くじだ。もしかしたら当たつているかもしねない。』

K氏は、急いで家に帰ると、あの時着ていた上着のポケットをまさぐつた。

「あつた！ これだ。」

そう言い終わらないうちに外へ飛び出し、宝くじ売り場へと急いだ。到着すると、

「おばちゃん、これ調べてくれる？」

と言つてクチャクチャになつた宝くじを差し出した。

『くじの抽選結果はすぐに判明した。なんと当選していたのだ。それも一等に。結果を知つたK氏は、小躍りして喜んだ。

『これで俺にも運が向ってきた。世の中、捨てたもんでもないな。』

そう思いながら、当選金を受け取るために銀行へと向かう足取りは軽やかだった。会社が倒産したことなど忘れたかのよ。

手続きが終わり、数日後に当選金はK氏の銀行口座に振り込まれた。それを眺めながら、ひとり一ヤーヤと笑みを浮かべ、「さて、まず何に使うかを考えなくちゃな。なにしら、宝くじのことがなじすっかり忘れていたからな。」

そう呟いた。

色々考えた末にK氏はまず、今まで無縁であつた高級料亭に行き、その料理を気の済むまで堪能した。家に帰り次は何を買うかを考える最中に突然、何処からともなく老人が現れた。

びっくりしたK氏は叫んだ。

「ど、何処から入つて来たんだ！」こには俺の家だぞ。」

すると、老人は笑いながら

「ほほほほ、わかつておる。じゃから此処に來たんじやよ。」

そう言い、続けて

「ところで、随分ご機嫌ではないか。どうしたというんじやな？」と付け加えた。K氏は宝くじが当たつた嬉しさと突然現れた老人に頭の思考が混乱したのか、

「どうしたかつて？ これがご機嫌にならずにいられるか。なにしろ宝くじの一等に当選したんだからな。」

と、つい口を滑らせてしまった。それを聞いた老人は

「それも知つておる。でも、その宝くじはお前さんでのないでないか。それなのにお前さんは、その金を使つてしまつた。拾つた日に当たつたら、警察に届けると言つておきながり……」

K氏は、ハツと我に返りその日のことを思い出した。

『あの日は俺以外に人はいなかつたはずなのに、どうしてこの爺さんは知つているんだ？しかも、俺は警察に届けると思つただけで口には出してないのに……』

氣味が悪くなつたK氏は

「どこで、それを知つたんだ。そもそもお前は何者なんだ。」

そう老人に聞き返した。すると、老人は

「わしか？ わしはあれじやよ。」

そう言って、窓から空に向かって指を突き上げた。そこには太陽があつた。

「太陽？ すると爺さんは、おじんといつもまだと言つのか？」

それを聞いた老人は

「そうじや、もつとも最近ではお前さんみたいにそう呼ぶ者は少なくなつたがのう。」

そう言つて笑つた。

頭がますます混乱してきたK氏は

「だつたら、俺が使う前に現れればよかつたじやないか。それに俺は会社が倒産して金に困つてたんだ。これくらいの事をしてもいいだろう。」

と、老人に向かつて自分勝手なことをまくし立てた。

「だから、きたんじや。会社が倒産することはわかつておつたから、これまで真面目に生きてきた、お前さんに、褒美のつもりでその宝くじを与えたのに……」

そう言つと老人は顔を曇らせた。そして続けて

「お前さんが、これを警察にちやんと届ければ、仮に落とし主が現れてもその謝礼金だけでも次の職を探す間には十分過ぎるほどの金額じやつたろうに。それにわしが与えたのだから落とし主は現れずに正々堂々と全額お前さんの物になつたのに。それをお前さんは届けようともせず、使つてしまつた……」

老人の話にK氏は開き直り、

「だつたら、いいじやないか。警察に届けなかつたのは手間を省いたつてことで、結果的には俺の物になるはずだつたんだから。」

すると、老人は

「それはお前さんが正直者だと思つての事じや。しかし、お前さんは自分に対しても嘘をついたのじや。」

そう言われてK氏は首をうなぎれ、言葉を失つた。自分に嘘をつい

たの一言が彼を正気に立ち返らせたのだ。老人は話を続けた。

「さて、お前さんは不正を働いたのだから、それ相応の罰を受けねばならん。これからは、その金を増やして、世の中の困った人達のために寄付をするのじゃ。ただし、悪事を働いて増やしたり、全額を寄付したりすることはならん。それと、お前さんが生活に必要な金額は使ってもよいだ。」

そう言い終わると老人の姿は消えた。K氏は呆然と立ちつくしていた。その姿は会社が倒産した時よりも悲壮感が漂っていた。

次の日、まだ昨日のことが信じられないようで、銀行の通帳を眺めてみた。そこには、間違いない宝くじの当選金の額が書き込まれていた。しかし、おてんとうさまで現れたことは嬉しさと後ろめたさで夢を見たのかもしれないと思つたりもした。

『この金を使うのはよそ。元々俺の金ではないのだし、とは言っても今更、警察にも届けられないしな。』

事情を聞かれると犯罪者にされるのではと思ったからであつた。  
『いっそ、試しに全部寄付してみよ。そうすれば、あれが夢だったのかもわかる。』

そう思い直し、さつそく慈善団体に電話を掛けてみた。すると、よくわからないまま断られてしまったのだ。偶然の可能性もあると思い、更に幾つかの団体に電話を掛けても結果は同じだつた。  
『昨日のことは本当だつたのか……』

そうなると、K氏はこのお金を基に増やしていくかなければならない。と言つても今まで利殖などする余裕はなかつたので、どうやって増やしたら良いかわからない。

『株でも買ってみるか。』

それぐらいしか思い浮かばなかつた。

K氏は、さつそく証券会社の扉をくぐつた。担当者の勧める株を言われるままに何種類か買ってみた。

『これで、損をしたら俺はどうなるのだろう……』

不安がよぎつたが、今のK氏にはこれくらいしかできないのだ。生

きた心地のしないまま家に帰り、食欲が沸くわけもなく、そのまま布団を被つて寝てしまったことにした。

次の日、日課である散歩に出掛けた。しかし、今までのような爽快感は感じられない。なにしろ、空を見上げればそこには太陽つまり、おてんとうさまで見てているのだ。後ろめたさと不安からかいつもより自然と歩く速度が早くなり、家に帰宅した。今までなら朝食を済ませ会社に出勤していたが、倒産してしまったのでその必要は無くなってしまった。

特別やることもないで新聞を手に取って読むことにした。そして通勤時に電車では読み飛ばしていた株式欄を見てみると、自分の買った株が上がっているのもあれば、下がっているものもある。しかし、トータルではプラスとなっていた。

K氏は喜んだ。その金額は数十万円というものであつたが、初めてにしては良い方ではと自分で思つたりもした。

早速、寄付をしようと以前断られた団体のひとつに電話を掛けてみた。すると今度は受け取ってくれるというのだ。

『爺さん、いや、おてんとうさまで言つていたことはやっぱり本当なのだな……』

K氏はその団体宛てに利益のでた分を振り込んだ。しばらくして、電話が掛かってきた。それは寄付をした団体からのお礼の電話だつた。K氏としては、妙な気分である。何しろ罰としてやつしている行為に対し感謝されるのだから。

いつもして、罰としてお金を増やすしては寄付をするという生活が始まつた。なにしろ相手は、おてんとうさまである。いつも見られているのだ。少しでもごまかしたり、手抜きをすれば更なる罰を「えられるのではと思つとK氏は気が休まらなかつた。

一度、まとめて寄付をしようとしたことがあつた。しかし、その日の夜に泥棒に入られてしまつたのだ。被害額は丁度、増えた金額と同じだけだったのだ。どうやら、増えた時にすぐ寄付をしなければダメらしい。

やつしりしてこの間に月日は流れ数年が経ち、寄付した金額も今では宝くじの当選金額を上回った頃、K氏はある事実に気づいた。それは、自分が特に新たに職に就くこともないのに生活できているところにいた。

しかも、慈善団体の関係者の中では知らない者がいないくらいの、有名な慈善家となっていたのだ。

『俺は仕事もせず罰を受けているにも関わらずいつもして生活できている。きっと、おてんとうさまが見守ってくれているからに違いない。感謝しなくては。それなのに、俺は慈善家として振舞つて いる本当は自分の意志でやつしていることではないのに。俺は慈善家ではなく偽善者だ……』

そう思つて自分を恥じていると、以前の老人が現れた。K氏は驚いて「どうしたのですか？　おてんとうさま。」

すると、老人は

「お前さんがその気持ちを取り戻すのを待つておつたのじゃ。お前さんはこの数年の長きに渡り、わしの与えた罰を受け入れた。そして、感謝する気持ちと恥じる気持ちを取り戻した。もう、罰は帳消しじゃ。」

そう言い残して、また姿を消した。

「ありがとうございました。おてんとうさま。」

K氏は空を見上げ、おてんとうさまにお礼を述べた。

そして、K氏は決心した。また新たに職を探そうと。そして、職が見つかったら手元に残ったお金は全額寄付することを。

やがて職は見つかった。そこで、今度は以前とは違い自分に嘘をつかずには残った金額を全て寄付をした。慈善団体も断つたりはせず、受け取ってくれた。

そこには、偽善者K氏ではなく、晴れ晴れとし清々しい気持ちになつた慈善家K氏がいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3417d/>

---

おてんとうさま

2010年10月10日03時49分発行